

2DN
ニダチノヒツジ

BREEDING PLANET FOR ALIENS AND GIRLS



エイリアンに娶られし少女戦士達

冬野ひつじ
挿絵 / Nandaz

立ち読み版

プロローグ 遊星より来しモノたち

第一章 少女、その身を捧ぐ

第二章 交わる夜

第三章 肉牢よりの光景

第四章 乳と蜜の流れる場所へ

エピローグ デーメールの船

006

015

076

166

226

316

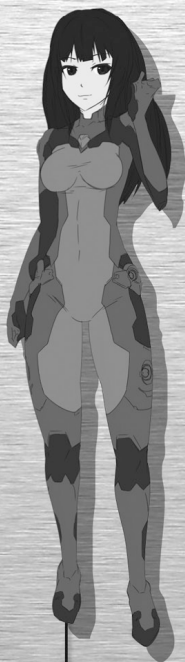
登場人物紹介

なはいざり あかり
柊 亜香里 コードネーム：エオス
スーツカラー：赤

学校で発生した事件のあと、突然ラボに連れてこられた女学生。宇宙科学の研究者になる夢を持っている。

こまつばら まき
小松原 真希 コードネーム：ソフィア
スーツカラー：黒

地球外生命体との戦闘状態に備えるチーム〈アイギス〉に所属する女性隊員。エリートでプライドが高い。



ささもり あすか
笹森 明日花 コードネーム：セレネ
スーツカラー：青

亜香里の双子の姉。彼女とは両親の離婚後会っていなかったものの、ラボで再会する。流れるような黒髪を持つ。

くりはま みよ
久里浜 芙蓉

地球外生命体の研究を行う科学者。亜香里たちをチームとして選抜する。

水泳パンツ姿の『比嘉』がニタニタと笑って立っていた。

「いつまで待ってもワタシの所に来ないから、迎えに来てやったんだよ」

「は、離せ……ッ！」

気持ち悪さに軽いパニックとなつて、少女は逃げようと身を振るが、『比嘉』の力は見た目に反して強く、簡単に抱き締められてしまった。

（ここにどうやって……いや、それよりもコイツ、何が目的なのだ!?!）

「さつきクリハマから連絡があつてな……今夜からワタシとキミは同室で寝る事に決まったらしいぞ」

少女が男の言葉を理解するまで、しばらく沈黙があった。

（同室で寝る……? それがどうしたというのだ……?）

その決定を何故この男がわざわざ嬉しげに告げに来

たのか、全く意図が分からなかった。

（今夜から、同じ部屋で寝て……いや、それだけなのか? 何のために?）

軽い混乱に陥っている少女の様子に、男は畳み掛ける。

「そうだ、つまり……我々はパートナーとして親交のレベルを上げなければいけないという事だな」

（親交のレベルを上げる……? という事は、まさか久里浜のヤツは我々にコイツらと性的な接触までを要求しているのか……!?!）

少しも念頭に置いていなかった恐ろしい可能性に、全身から血の気が引いた。

（あの女なら考えて当たり前だ! くそッ、迂闊だった……!）

「そういう命令なら従うしかないよな? 命令は絶対なんだろう?」

「うるさい! 早くここから出て行けッ!」

エイリアンとの生殖実験とは少し考えればいかにも久里浜の言い出しそうな事だったが、裏切られたという怒りよりも、相好を崩して熱い息を耳朶に吹きかけて来る異星人への生理的嫌悪が爆発しそうだった。

「私は絶対にアンタなんかの好きにはならない……！久里浜には私から連絡して命令の確認を……！」

「……そんな事を言っているのかな？」

男はニヤツと嗤う。

「上層部からお墨付きを貰ったんだ……ワタシとキミ、今のこの国の政府にとって価値がある存在はどちらか……キミなら分かるだろう？」

（あの女……まさか、これが……人間とエイリアンの生殖実験こそが最初からの目的だった……!?!）

身体的には（アイギス）としての適性があるとは到底言えない明日花。

その双子の妹である、一般人としてはアクシオンと

の相性は完璧に近い亜香里。

そして、人間でありながらそれを超えた能力を持つハイブリッドチルドレンの自分。

（繋がる……全てがこの一点で繋がる……！ 新生

（アイギス）は初めからコイツらとの生殖実験を目的として久里浜に用意されたものだったのか……ッ!?!）

ドアのガラスに映る少女の顔は、啞然としたものから、強烈な怒りを湛えたものに変わる。

（何故もつと早く見抜けなかった……!?! いや、せめてあの時運動場で明日花をしっかりと問い詰めるべきだった……!?!）

少女の思考を読んだのか、『比嘉』は含み笑いをした。「クリハマは我々を利用するつもりでこの共生計画とやらを始めたようだが、我々もバカではないのでね……そちらがそのつもりなら……こちらも愉しませてもらうんじゃないか」

（ふざけるな！　こんな任務……いや、任務というのは名ばかりのあの女の企みを受け入れるつもりはない……！）

男の手が水着越しヒップをゆつくりと撫でる。

「ま、待て……ッ、こんなの何かの間違いだ……今すぐに確認を……！」

真希は懸命に伸ばした腕でパネルに指を走らせ、認証コードを打ち込む。自分宛の命令や文書が来ていれば施設内のこうした端末で即時に見られるようになっていた。

（『首相命令第一号』……これか!?　頼む、コイツの知らない嘘であつてくれ……!）

呼び出した文字列に目を走らせた少女の身体から、力が抜ける。

（パートナー既定の改定……具体的には……身体的濃厚接触を含む最終レベルまでの引き上げを……そんな……やりたくない……嫌だ……）

薄い水着一枚でエイリアンと触れ合っているという状況が何を表すのか、頭と身体がやつと理解する。

（コイツ、ここで私を……!）

「納得したかね？　アイツらからすればキミはもうワタシの所有物だ……それとも我々の要求を拒んでまでキミらを護ろうとしてくれる人間が、誰かいるかな？　もういないだろう？」

「あ……や……ッ、やめろ……ッ！」

水を吸って重たくなっている生地がゴツゴツした指で寄せられ、ずらされた。

「……さて、それではさっそく任務に取り掛かってもらおうかな」

尻たぶを片手で割られ、後孔が剥き出しにされる。
「なッ!!」

「生殖器そのものの調査も魅力的だが、ワタシが欲しいのは……こっちの方なんだよ」

あろう事か、男はそこをペロンと舐め上げたのだ。

「ひ……ッ!!」

恥辱のあまり、全身に鳥肌がぶわっと広がった。だが男は嬉しげに少女の排泄穴の観察を始める。

「ほう、ここが真希クンの肛門か……やはり第二次性徴期付近だとまだ色が薄いらしい」

そんな事を呟くと、おもむろに口を寄せ、次の瞬間、ジュルル、ブジュウウ! と吸い出すようにしてむしやぶりついて来た。

(コイツ、お、お尻の穴を……吸ってるッ!!)

予想もしていなかった行動に、少女は驚愕して息を呑む。

(まさか、この私がこんな事をされるとは……ッ!)

排泄器官は排泄器官として、少女の中では厳然たる区別が行われていた。だから、思考が付いて行けない。自分が何をされているのか意味が分からない。

(そこは排泄をする場所……いや、そんな事より、コイツの目的は何だ!?)

男の力は人間のそれとは桁違いに強く、真希の片脚は尻の下に敷かれ、もう片方は万力のような力でガツチリと押さえ付けられる。

「少し静かにしてくれないかな? これでどうだ?」

下半身を固定されたまま男が首に掛けていたスポータオルで猿轡を噛まされる。

「んーッ、ふう……ッ、ふぐッ、ふうう……!」

「ふむ、なかなか似合うよ……ウン、あんな無粋な強化スーツよりよっぽど良い」

頷きながら、男は自分のズボンから肉棒を取り出した。

(……ここ、こんなところまで擬態しているのか……)

知識としては習っているペニスの形状は、人間のそれと同じだ。だが、イラストとは違い隆々と勃起して充血している生殖器は、少女の目には実際よりも巨大に映り、ある意味ではエイリアンよりもグロテスクで胸のむかつきを起こさせる。

(醜すぎる……くッ……こんなモノを、受け入れなければならぬとは……)

「どうだね？ それともチンポを見るのは初めてなのかな？ ほーら、これが真希クンの大嫌いな男のチンポだぞ？」

喋りながら既に興奮が最高潮に達しているのだろう、先端からはヌルヌルとした粘液が吐き出されている。その粘液をペニス全体に塗り込めると、男は真希の下肢を抱え、尻をグイッと上げさせる。

「んく……ッ!？」

塞がれた口から、くぐもった悲鳴が上がった。

(ちよつと待て！ コイツ、こっちに自分の生殖器を入れる気なのか!?)

パニックに陥っている間に、今度は肛門の周囲をぐにぐにと指で押される。

(人体の知識がないのか!?! いやそんな事はない! じゃあコイツ、分かかっててお尻の方に……!?)

「……よし、このくらいで大丈夫だろう」

(待つて！ こんな無理……！ 無理だッ！)

まだ硬い小さな穴にミッチリとした圧迫感を覚えた少女は、息を呑む。

「んッ、んん……ッ!？」

括約筋を必死に閉めて抵抗したが、男は腰に力を入れて圧をかけると一気に蕾を割り広げた。

(だからッ、そんなモノ入る訳がな……ッ!?)

「んぐぐッ!？ ぐ……ッ!？」

肉の壁を押し開いて、怒張が埋め込まれていく。

「んふうッ!？ ふう……ッ、ぐう!？」

男の生殖器は少女の肛門の径よりも太い。それがジリジリと振じ込まれて来るのだ。排泄の感覚とは正反対の、息ができないほどの圧迫感を、真希はガラス戸に爪を立ててなんとかやり過ごそうと試みる。

(あ、あああッ、い……痛ッ……！ やっぱりこんな無理……ッ!)

見た瞬間太いと感じた肉棒は、実際に挿入されてみると想像を絶する重量感で真希の腸壁を抉っていた。

「ふはッ、はあッ、やつぱり排泄孔だから狭いんだな……ッ」

男の呟きがやけに反響して聞こえる。

「う……ッ、ちよつとキツすぎるな……力を抜いてくれないかね？」

「ンッ、ンン……！ ンーッ!?」

だが、いくら自分の身体とはいえ、犯されている最中の直腸から力を抜くなどという芸当は少女にはできないはずがない。

（バカな事を言うなッ……そつちこそ、さつさと諦め……うあ……ッ、はあ……ッ……くッ、苦しい……ッ！
ああ……ッ、あ、あ……ああ……！）

息を吐き出し凄まじい異物感に耐えるだけで、少女の額には大粒の汗が浮かんでいる。腸の中で蠢く肉棒の形が嫌でも分かり、便意とはまた異なる猛烈な違和

感に意識が引つ張られそうになっていた。

（こ……これが男性器のッ、輪郭……ッ？ デコボコして……なんて気持ちの悪い……）

広がったカリの部分や、それとは対照的に緩んで皺になった包皮の感触までが、腸壁から少女の脳に吐き気を催すビジョンを叩き込んで来る。

（うう……ッ、血管の筋まで分かる……嫌だ……ッ！）

それでも、ジワジワと確実に拡張されていく括約筋は、されるがままに肉凶器を呑み込み続けるしかない。下手に動けば裂傷を負うと本能的に感じた身体はひたすら蹂躪が過ぎ去るのを待っていた。

（それにしても、ふ、太い……ッ……身体から力が抜けそうだ……）

腸壁の襲を一つ潜るたびに、ゴリッとした感覚がダイレクトに伝わり、情けない声が漏れてしまいうるなる。

（んぐう……ッ、くうう……ッ……お腹の奥が……苦

しくて……熱い……)

「ハアッ、これが人間の直腸か……ッ、イイものだ！
痛いくらいに締め付けて来るッ！」

直腸をこじ開けて進んだペニスがようやく結腸に達し、男はまるで大仕事を終えたかのごとく、フウッ、息を吐いた。

(何を勝手な事をッ、気が済んだらさっさと抜け……ッ！)

だがその思いも空しく、男は、今度はその肉棒で少女の腸内をゆつくり掻き回し始めた。

「んんぐッ、んふう……!?!」

男根の動きに合わせて少女の小さな身体はビクンビクンと震える。

「はぁッ……これは最高だッ！」

男は次第に腰の動きを速め、夢中になり始めたようだ。

パンッ！　パンッ！

腰を打ち付ける音がプールサイドに響く。

「んぐ！　んんッ、うぐ……ッ！」

真希は男の下で無様に喘いでいた。気が付けば、頬が熱いもので濡れている。

(嫌だ……!!　こんな、好きなようにされるだなんてッ、嫌だ……ッ!)

思わず首を振ると、その幼げな仕草が男の劣情を更に奮い立たせたのだろう。身を乗り上げて来た男にベロベロと涙を舐められる。

「んぐッ！　むう……ッ！」

必死になって顔を背けても、頭を掴まれて、涎で濡れた猿轡ごと唇を吸われた。

(は、離せッ！　この変態……ッ!)

「命令にまだ逆らおうとしているのかね？　しょうがない子だ……ッ」

「むぐうう……ッ!?!」

伸びた手に水着の上から乳首を摘まれてしまうと、



もう逃げられなかった。

ずぬぬ……ッ！

意識が乳首へと逸れた隙に、男のペニスが無遠慮に奥まで突き込まれて、

「んはぁんッ!？」

タオルを外された途端、驚きと抗議の声が口から飛び出す。

「ぬ……抜けッ！ 抜くんだッ！ ふざけないでさつさと……んッ、ひいいッ!？」

乳首を指先でごりごりと押し潰されて声の上擦る。

「こんなの絶対認めないぞ！ このまま言いなりなんかにはッ……ぜ、絶対にッ……!？」

激しい突き込みで身体を揺さぶられながら、少女は涙をポロポロと零していた。

「私を誰だと思って……んッ、くはぁッ!？」

結腸を突いていた肉槍が、ひときわ大きく膨らんで、少女はたじろぐ。

(え!! や……ッ、嘘ッ!!)

グッ！ グッ！ と、中を深く抉るように突かれて、これから何が起こるのかを少女は直感で悟った。

「やッ!？ やめ……ッ!？」

どびゆるッ！

熱いゲル状の何かが、腸の奥に叩き付けられるのを感じて、真希は目を見開いた。

どびゆ！ どびゆるる！ どびゆ……ッ！

「あぁッ、いいぞッ！ そのままいい子でたつぷり飲むんだ……ッ!？」

ガラスに頬を押し付けられ、狂ったように腰を打ち付けられる。

「いいぞッ！ やはり人間の牝は最高だ!？」

びゆるるるッ！ びゆく！ びゆくびゆくッ……!？」

……!？」

脚を動かし、男を押し退けようとするが、突き刺し

たままの肉槍に奥を強く突かれて、抵抗は簡単に封じられてしまう。

「ああ……良かったよ、真希クン……」

挿入したまま、男は少女の顔を覗き込んだ。

「ワタシのザーメンの感触が分かるだろう……？ 人間の牡の快感というものは一度味わうとクセになりそうだな……ハアッ、射精の瞬間はまさに天にも昇る心地というものだ」

「……黙れ」

嫌悪を込めた目で睨み付けるが、男は物ともしない。

「うむ、どうやらキミのアナルはこの星でも絶品のようだ……この男が欲しがっていたのも納得だよ」

（そんな情報までコピーを……!!）そしてコイツはそれを真似して愉しんでいる……!!）

エイリアンの常軌を逸した行動に、背筋が冷たくなつた。

（やはり、どんなに知能が高くても、コイツらの本性

は残忍なのか……）

「しばらくは愉しませてもらうよ」

「誰が……ッ！」

これ以上の苦痛と恥辱を味わうくらいなら、ここで命を絶つた方がマシだ。そう思えるほどに、排泄器官へのレイプは少女のプライドを打ち砕いていた。

「そんなに嫌がる事はないじゃないか……仮にも我々はこれで名実ともにこの惑星で言うところの『夫婦』となつたんだ。あまりつれない態度を取ると……命令違反でお仕置きするしかないな」

（そうだ、これは……命令……だった……）

不意に北見の姿が臉の裏に浮かぶ。

命令に従つて命を落とした者達が一人一人脳裏に甦る。

（そうだ、命令……だとしたら、私だけが逆らう事はできない……）

少女の瞳から光が消えた。

「アスカ……オキテ……ボクト……ア……アソボウ……ヨ……」

「……いたた……ッ……」

頭を押さえながら、明日花は身体を起こした。

「……えっ、な……何なの、コレ……?」

そこは普段^{ラムダ}Aがいる寝室だった。だが今は、布団が敷いてあるはずの床には数え切れないほどの細い触手が波打ち、その中心に、見覚えのない黒い物体が鎮座している。

「……アスカニ、ボクカラノ……プ、プレゼント……ダヨ……」

(……プレゼント……? あれが……?)

初めそれは、馬の鞍に似た不安定な形の、背もたれのない椅子のように見えた。

(何だっけ……あれって、確か……)

少女は何十年か前に大流行したという、ダイエットを目的とした健康器具を連想する。スイッチを入れると前後、左右、上下と、飛び跳ねる馬を模した激しい動きをする代物だ。

「……ッ!」

だが、もう一度それをよく見た途端、明日花は身体を竦めて小さく悲鳴を漏らしていた。

(アレ……もしかして、全部……触手でできて……!?)

蠢いているシートの中央部には本物のマシーンには付いているはずのない黒々とした棒状の物体が隆起し、床の触手と連動するかのようにはヒクヒクと脈打っている。

(そ……そんな……まさか……誰か……冗談だと言ってよ……ッ!)

もしもこの物体が椅子だとするならば、その隆起は座る者の秘部を貫く事になる。健康器具というよりは、

どう見ても拷問器具と表現した方が正しいおぞましきだ。

(あれを私に、つて事は……私に座れつて、そういうつもりなの!?)

少女は恐怖のあまり、身体に力が入らない事にもしばらく気が付かなかつた。

(殺そうと思つてたのがバレた? いや、まさか……だつて、アイツはろくに喋る事もできないくらい弱つたのに……)

震える両腕で自分の身体を抱き締めようとするが、腕にかかつた指先は力なく滑り落ちてしまう。

(これ……アイツらの神経毒……!? まずい……かなり打たれてるみたい!)

強化スーツの首元の僅かな隙間から注入された毒は、少女の身体を完全に無力化していた。

(それに……スーツに、穴……開いて……!?)

股間に、溶けたような穴がぽっかりと開いている。

「ズット、マツテタンダヨ……アスカ……」

青褪めている少女の目の前で、触手椅子は、のろのろと不規則な蠕動を始めた。

「キ……キミノコト、モットシリタクテ……」

ズリユリユリユ……ズリユツ、又チャ……ツ。

「ひ……ッ!」

動くのは座席部分ではなかつた。

グニユグニユツ、又チュツ……グチュチュチュ……

……!

少女の目の前で、そそり立つ棒の部分もまた、くねくねと自在に、そして激しく動き始めたのだ。

「……あ……あ……や、やだ……ッ……」

張りのある素肌に、鳥肌がサツと立った。

豆電球の灯りに浮かび上がる黒い巨根は、醜く膨らんだ亀頭の部分を自在に振り回して少女の恐怖を掻き立てる。

「嫌……ッ……!」

これから何が始まるうとしているのかという理解と、逃れられないという絶望に心を握り潰されて、少女は譫言のように呟くしかない。

「逃げなきや……ここから逃げなきや……」

太腿は恐怖に震えている。なのに、身体は少しも動かない。

「ジュニユリ……ヌチユ……ンツ！」

「ひゃ……ッ!? は、離してッ！」

振り向いた時には既に遅かった。這い寄って来た触手は少女の腕を背中で縛ると軽々と吊り上げ、触手マシンの前まで運んでいく。

「嫌ッ……こんなの絶対にイヤ……絶対に座らないからッ！」

だが、身体は鉛のように重く、頭は混乱のあまりまともな思考を紡げない。

「ダイジョウブ、キット……スグニ、キニイルヨ」

下から伸びて来た触手に股を大きく広げさせられ、

幾本もの触手に身体を支えられながら、明日花は蠢く椅子に跨る格好になった。

「離して! このバケモノッ!」

「ダイジョウブ……ダイジョウブ……」

まるで悪趣味なクレイニングゲームのような動きで、触手は少女の膣口を擬似ペニスの真上に落としていく。

「ひ……ッ、押し込まないで! こんなの入らない……ッ!」

少女は懸命になって擬似ペニスから逃れようとする。自分に体重があるのがこれほど恨めしいと思った事はなかった。

(もうダメ……ッ! 入っちゃう!)

絶望の感触を、しつかりと感じ取ったまま、

めりめりめりめり……ッ!

黒い凶器に少女はその身を貫かれた。

「いッ、いやああッ!!」

胎内に入れるのは明らかに大きすぎる突起物に、咽

喉から悲鳴が飛び出した。

「痛いッ！ 抜いて！ 抜いてよお！」

「マダ……コレカラダヨ」

「ずりゆりゆりゆッ！ ずぶ……ッ、ぬち……ッ……」

……

「抜いてつてばッ！ お願いッ！」

ぬめる勃起は少女の薄い肉花弁を掻き分け、容赦ないスピードで膣を抉り込んで来る。まだ成熟し切っていない蜜壺は、明らかにオーバーサイズな巨根をなんとかして受け入れようと広がり、肉襲で懸命に抱き止めようとしていた。

「あああッ、こ、こんなの無理！ 無理だからあ……」

……

「ず……ずずッ……！ ずぬぬ……ッ！」

無垢だった胎内はエイリアンの触手に蹂躪されて、弱々しく痙攣するしかない。

（これ以上奥に入つて来たら、私のバージン……破ら

れちゃう！）

処女膜を失うまではもうほとんど秒読みだ。少女は闇雲に身体を捻り、腰を浮かせて逃れようとする。だが、両腕どころか両脚まで搦め捕られているこの状況では、どうあがいても腰を浮かせて逃げる事は無理だった。

（こんな触手なんかで……ッ、破られたくない、のに……ッ！）

叫べども叫べども、強制騎乗位の姿勢で処女膣をゴリゴリと貫通されていく。

「もうやめ……くはッ……！ かはあ……ッ……!!」

恐怖に、声が掠れる。

（ヤダヤダ……ッ、誰でもいいから助けて……ッ！）

明日花が小さな悲鳴を上げかけた瞬間、ひとときわ膣口が広がるような感覚が起こり、

ぶちん……ッ！

「あ、ああ……ッ!!」

確実にそれと直感できる痛みが少女の目の奥で火花を散らした。

(そんな……ッ、私のパーズンが……エイリアンに……!?)

だが、触手の蹂躪は少女を破瓜の感傷に浸らせてはくれない。痛みで呆然としている間にも、少女の膺は更なる蹂躪にひしゃげ、変形する。

ずぬ……ッ！ ずぶぶ……ッ、ずぶ……ッ！
(ふッ……深い……ッ！ そんな深くまで入って来たら……怖い……!)

少女に許されたのは、歯を食いしばって恐怖と痛みを耐える事だけだった。

「……あッ、ひ……ッ、ひうう……ッ……」

ほっそりとした内股が、触手に巻き付かれたままビクビクと痙攣している。

「……アスカノナカ、ゼンブ……ハイッタ……」

鮮血が結合部から一筋流れ落ちたのにも頓着せず、

エイリアンは嬉しげな声で少女に巻き付けた触手に一層の力を込める。

「アスカ、アタタカイ……ボ……ボク、キモチイイ……」

幾本ものぬるぬるとした触手が、腕を、腿を、首筋を、愛撫する。

「アンタの感想なんかどうでもいいからッ！ 痛いんだからもう抜いてよッ！」

間断なく分泌されている粘液が、少女のスーツをコーティングしていく。

(ううッ……ぬめぬめして蛭螭みたい……ッ、それに、ニオイも最低……)

だが、少女は自分の身体の変化に気付き始めていた。
(これ……コイツの粘液って、そういえば……毒の成分以外にも……)

乳房や股間の撫でられた部分の毛穴の奥が、次第に熱を帯びて来る。首筋や頬もじわじわと熱くなって来

ていた。

「ワカツタ、アスカモ……キモチヨクスル……」

「そうじゃなくて……んぶ……うッ!?」

大腿開きで膺を串刺しにされたまま、唇に触手を振
じ込まれる。

（やっぱり……ッ、気持ち悪いはずなのに、私の身体
……コイツに反応してる……!!）

生臭い触手に全身を拘束されているというのに、子
宮の奥がじんわりと熱くなつて来ている事に少女は戦
慄する。

（コイツ、私に何をしたの……!?)

熱だけではない。切ないようなもどかしいような感
覚が全身に漣のように広がっていく。

（変な匂いなのに……頭が……クラクラして……ああ
……何なのコレ……）

頭の中も、霞がかかったような乳白色に染まり、何
も考えられない。

「ン……ふうッ……ふうう……ン……ッ……」

いつしか少女の声音が嫌悪から戸惑いのそれへと変
わり始めていた。

（ヤバイ……今抵抗を止めたらコイツの好きにされち
やう……!）

だが、塗り込められる粘液の量はますます増え、ス
ーツの間に入り込み、少女の身体は今や至る所が性感
帯になりつつあった。

「んく……ッ、んあッ……ふう……ッ、んぐうう……」

力が抜けた太腿を撫で回しながら、触手は滴る粘液
を爪先まで塗り込める。更に、たわわに実った乳房へ
も伸びると、まるでローションのように粘液を塗して
揉み解すのを繰り返す。三人の中では最もサイズの大
きいバストは、見る見るうちに濡れをぼつていく。

（ああ……身体のゾクゾクが止まらない……ッ、おっ
ぱいも熱くて、それに……乳首まで硬くなって……）

抵抗が薄れ始めている明日花の様子に勢い付いたの

か、触手は更にその腕を伸ばし、土踏まずや脰くぶらはし、果ては指の間にまで匂いを染み込ませるかのようによい回る。

「んんッ！ み……耳もとッ、だめえ……ッ！」

耳朶を軽く撫でられるだけで身体が跳ね上がり、嬌声が零れ出る。

（うく……うッ、ダメ……ッ、アソコの奥が脈打つてみるみたいで……ッ、こんな感じ初めて……！）

「アスカ……モット、キモチヨクシテアゲル……」

そうこうしているうちに、少女は触手ペニスに貫かれたまま全身を触手と粘液で包み込まれてしまった。

（触手……熱い……粘液も熱くて……はぁッ……もう、何が何だか……）

「……は、離して……」

残った気力を掻き集めて、少女は抵抗を試みる。

「離してよバケモノ……ッ、んッ、所詮は死にぞこないのエイリアンのくせに……ッ！」

毒つきながら、肉バイブから意識を逸らそうとする。（これが終わったら、すぐにでも殺してやるんだから……ッ！）

処女膜を破られた出血はもう止まったようだった。なのに、膣内には触手から滲み出た熱い粘液が満たされ、切ないようなもどかしいような感覚で満たされていた。

「マダコレカラダヨ……コレカラモット、キモチヨクシテアゲル」

「い……ッ、いや……ぁ……ッ！」

触手ロデオの上に少しづつ体重をかけさせられたせいで、膣に食い込んだ巨大な肉棒の先は子宮口を潜り抜けようとしていた。

ずぬぬ……ッ、ずッ……ずぬう……ッ……。

自分の体重が全て乗った圧迫感、暴力的としか表現しようがない。

「サア……ボクト、アソクデ……」

ガクン……ガクン……ッ!

跨っていた椅子が、いきなり上下に揺れ出す。

(ひゃ……ッ、中でも動いてるッ!)

座席の部分だけではない。壁の奥深くまで入り込んだ勃起が、子宮口に頭を密着させたまま円を描くようにくねり始めたのだ。

「んはあ……はあッ、はうう……ッ……あッ……ああッ!」

生きたロデオマシンの動きは予想以上に激しかった。

「んあッ!? んああああッ!」

少女の身体は玩具のように揺れ動き、その首筋からは水滴が幾つも飛び散る。触手に固定されていなければとつくに振り落とされているのではないかと思わせるほどの、不規則で激しい動きだった。何よりも、上下の落差は十五センチほどもあるため、小柄な裸体はそのたびに胴上げでもされているかのように飛び跳ね

る。まさに拷問以外の何物でもない。

(コイツ……ッ、分かっててわざと……!)

何よりもその動きの影響を受けているのは、子宮だった。

ただでさえ身体の重みで強く圧迫された状態で、延々と入口を嬲られる。女体の最も弱い部分に強烈な快感を与え続ける事で明日花の反応を見てやろうという魂胆なのだ。

「シキユウ、スキ? キモチイイ? ウレシイ?」

耳元に、ずろりと太い触手が触れる。

「あ……ッ、ああッ、はあッ!」

言葉が出ない。

ただ跨っているだけで、少女の下半身はたちまち快感のうねりに満たされてしまう。

ズンズンと突き上げる圧迫感を骨にまで感じながら、様々な角度に首を傾けて子宮をこじ開けようとすると肉塊の動きに蕩かされる。



少女戦士は決断する。

「く……ッ、エ、エネルギー保持のためスタンドアロンモードに移行を要請する」

そう言っただけでも、全身に汗が滲むのが分かった。

「……いいわ、それでは戦闘中の指揮権は現時刻を以て全て貴女に委任します」

思ったよりもあっさりと芙蓉は応じる。

(これでもう、誰にも見られないで済む……)

命綱を自ら手放す如き愚拳。

それでも、今の少女にとつては最も適切な判断はこれしかなかった。

『本部了解……目標のコア破壊後、直ちに座標の発信及びシールド解除を行って下さい』

『こちら中継車、シールド外にて待機します』『戦車中隊、駅ビルを中心に半径一キロに沿って防衛線を敷設完了』

まだオペレーター達はソフィアの違和感に気付いて

いないのか、淡々としたやり取りを交わしている。

「……では、これで通信を切る……ッ！」

『うッ……ふ、うッ……!?!』

強化スーツを着用しているのにもかかわらず、まるで糸纏わぬ姿であるかのような淫靡さで、ソフィアは身体をくねらせ、悶え続けていた。

『あくうん……ッ、んんッ、はひ……ッ』

戦闘を始めてからもう五分が経過している。

「ほら、どうしたの……? 黙っていたら分からないわよお?」

ソフィアとの通信が全て途絶えたはずの本部。

その奥のドアの中で、久里浜芙蓉はモニターに向かって見世物でも楽しむかのような笑みを浮かべていた。

モニターの向こうでは、漆黒の強化スーツを着た少女がエイリアンと戦っている。

いや、エイリアンの前で、ひとり悶えている。

「さっさとおねだりしちゃえば楽になれるのに、随分と強情ね……まあ、そういうのを含めたのが、ペットを飼う醍醐味なんでしょうけど」

女はひとりごちると、人差し指でモニターに触れる。真つ赤なマニキュアで彩られた長く鋭い爪が、戦士のボディラインを、ねっとりとなぞる。

「活きが良くて生意気なペットの方が調教し甲斐がある……そう思わない？」

後ろに立っていた人影が僅かに動く。

「どれだけ抵抗しようと、牝犬は牝犬……哀れな愛玩動物……それをそろそろ自覚させてやらないとね。どれだけ足掻いても、二度と、人間の世界には戻れないって事を……」

さながらサーカスを見物する観客。

いや、剣闘士の死闘を愉しむ女王だろうか。

「貴女だけじゃないわ……もうすぐお仲間もそっちに行かせてあげるから、せいせいそれまで頑張るのよ……」

……私の可愛い牝犬ちゃん？」

白衣の女は、ぎこちない動きでそれでもなお戦おうとする少女戦士にウィンクした。

「あふうッ、くはあ……ッ」

（苦しい……ッ、お尻……ッ、さつきよりも熱くて、ジンジンして……!）

スピードもパワーも増幅されている今の真希にとつて、これまでより強大とはいえない目の前のエイリアンはさほど力の差がある相手ではないはずだった。

（悔しいッ! このスーツなら勝てる、のに……ッ!）
チャンスは何度もあるのに、悉く無駄にしてしまう。それは、腸内の異物のせいだった。

（はあッ、内側ッ、こ……ッ、擦れて……えッ、ああッ、ダメだ……ッ!）

襲い来る触手の軌道を計算しながら斬り込もうとしても、腸壁の疼きに気を取られ、何度もよろめく。

(あッ、今……ならッ、最短距離で斬り込め……ひゃうンッ!!)

頭ではできている計算に身体が付いていかない。身体が伸ばせない。

「ひう……!!」

飛び掛かって来た触手を躲し切れずにその先端が腿を掠め、

「……ッ!!」

途端に、全身に甘い電流が走る。

(まずい! スーツの感度が上がりすぎて……!!)

触手から分泌されている粘液が一滴付いただけで、その成分が増幅でもされたかのように反応してしまっているのだ。少女は慄然とする。

(これじゃ却ってダメージを増幅しているようなものじゃないか……!!)

いつの間にか、スーツの股間部分には、うっすらと汗ではない染みが浮き出ていた。

(はあッ、こんなの、いくら強化されていたって、ただの下着と変わらない……ッ、あのバカ女ッ、少しは考えて作れ……ッ!)

その部分を意識すればするほど、感覚は敏感になり、少女の動きは精彩を欠く。

(ダメだ、不用意に興奮したら制御ができなくなる!)

落ち着こうとしても、全身に密着した強化スーツは快感を受けるたびにそれを増幅させ、全身に快感電流を広げてしまう。両乳首の突起は浮かび上がり、そのせいかスーツの食い込みは更にきつくなっていた。

「んあ……ッ、ふあッ!!」

身体を動かすたびに前の穴と後ろの穴を強い刺激が襲う。

(アレが入っているのはアナルだけなのに……ッ、全身が、弄られてるみたいだッ!)

今や乳輪の形まで浮き出ている始末だった。

光沢スーツに包まれた戦士のヒップはこれ以上はな

いというくらいに引き締まり、小さく痙攣している。

（ああ……ッ、早く終わらせて……ッ、コレ、脱がなきゃ……!）

バシユッ!

気が逸れた一瞬、左腕のスーツに裂け目が走る。

「あッ!?!」

皮膚が破けたと同時に、熱湯でもかけられたかのような感覚が全身を覆った。

「あ、あひッ……くは……あ……!?!」

だらりと垂れ下がった腕に、しかし痛みはない。

そしてその代わりに、猛烈な欲求が込み上げて来る。

（お尻でイきたい……ッ! お尻の中で……ッ! イかせて欲しいッ!）

S字結腸まで届く長大なパイプに、少女戦士の意識は完全に引き摺られていた。

（欲しいッ! お尻の中……ッ、アレでゴシゴシして……擦り上げて欲しい!）

発情物質の回った脳は下等極まりない欲求だけを増大させ、少女戦士のアナルを収縮させる。もう身体のコントロールなど無理な状態だった。

（イきたい……! このままじゃ、生殺しでおかしくなる……ッ!）

腸内への刺激だけで絶頂できるように仕込まれた排泄孔は、敵の目前でもヒクヒクと蠢いて物欲しげに蜜を湧かせる。

「はあ……はあ……ッ……」

アナル絶頂の誘惑に、とうとう少女は負けた。

（いけない……ッ、こんな無様な……ッ、ああ、でもッ、もう我慢できない!）

きよろきよろと辺りを見回して、物陰を探す。

（動きはさつきより鈍ってる……次の攻撃までは、近寄って来ないはずだ）

一人人が隠れられるほどの瓦礫の小山が目に入り、そこに駆け込む。

(電波も遮断してるし、住民も退避させてる……だから……通信を切ってさえおけば、私を見ている人間はいない)

後はもう夢中だった。

「んく……うッ、はッ、はぁあ……ッ」

べたんとその場に尻餅を突き、アナルを地べたに押し付けるようにして、パイプの根元部分を少しでも中に押し込もうとし始める。

「あ……ッ、くは……ッ、あぁッ、んはぁあ……ッ！」

見られていないという思いが少女を大胆にしていた。熱を帯びたアスファルトを相手に自分を慰めようと、必死に腰を振り、快感を貪ろうとする。

(これで一回イけば、すぐやめるから……ッ！一回だけッ！)

喘ぎに合わせて、薄い背中が上下に動く。

「あぁンッ！ はぁッ、はぁぁッ！」

恥も外聞もなく、少女は肛門自慰に耽る。

(もつと奥ッ！ 奥に押し込んで……ッ、早く中でイかないと……！)

だが、足りない。

ただの自慰では少女はもう満足できない身体になっていた。

被虐性癖を刻み込まれた腸壁には、獣じみた苛烈なピストンでなければ物足りないのだ。

「んぁッ！ あうッ！ あぁッ、はぁあ……ッ！」

半泣きになりながら、漆黒の戦士はパイプの嵌ったヒップを地面に叩き付ける。

「あッ、はぁッ！ お願ひッ、イってッ！」

肛門の内側から刺激される子宮や膣も、熱い蜜を垂らし、早く絶頂したがっている。

「ひッ、ひゃうンッ！ なんでイけないんだ……ッ!!」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!



電子書籍も配信中!

F★ROOM マガジン

3D DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



大人気PCゲームのコミック多数連載!



コミック UNREAL

ヒロイン エロチDX

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、ダウンロードサイトなどで好評発売中!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。